

実習セメスターにおける学外学校体験の評価と検証

A Research on Effects of Teaching Experiences in Basic Experience Area in the Semester for Juniors

山 本 幸 市
Koichi YAMAMOTO

村 上 幸 人
Yukito MURAKAMI

藤 田 耕 一
Koichi FUJITA

福 間 敏 之
Toshiyuki FUKUMA

長 澤 郁 夫
Ikuo NAGASAWA

境 英 俊
Hidetoshi SAKAI

要 旨

1000時間体験学修を実施して8年、実習セメスター（3年後期）における学外学校体験活動（以下実習セメスターと記す）を実施して6年が経過した。この実習セメスターがもたらす学生の教師力育成における効果や学生受け入れ校の評価を分析し、今後の実習セメスターの在り方について考察を行うこととする。

〔キーワード〕 実習セメスター、教師力の育成、学校との連携

I 実習セメスターについて

1. 導入について

実習セメスターは、平成18年度より3年生を対象に始めた取り組みである。この期間（9月～12月）は、基本的に教育実習以外の講義・演習等の履修をせず、学外での基礎体験活動を行うこととしている。そこで、協定を締結している市町村の公立幼稚園、小中学校や県立の特別支援学校に、学生が平日に様々な活動ができるように募集をかけていただき、登録した学生の活動に対する支援をしていただくシステムで行っている。

この活動を実施する目的として、次の2点を設定している。

- ・地域の教育活動に学生が参加し、教育活動を支援する。
- ・学校や地域における子どもたちや教師（指導者）等、幅広い人々とかかわりをもち、教育的実践力を高める。

2. 実施の手続きについて

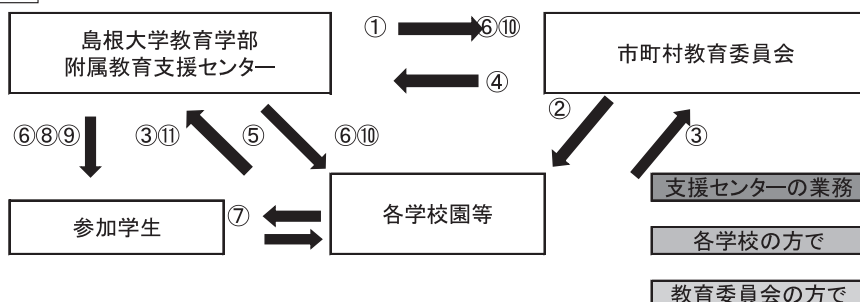
通常の基礎体験活動は、大学と受け入れ事業所（学校等）とで連絡を取りながら行っているが、実習セメスターでは、市町村教育委員会を通して活動募集を行い、参加学生を大学から教

育委員会へ報告するなどし、教育委員会で状況を把握できるようなシステムにしている。次の図1が、手続きについての流れである。

今年度より、協定を締結していない市町村の学校においても、学生の母校であることや学校側の承諾を得られた場合は、実習セメスターの学外学校体験活動として体験できるシステムとした。

実習セメスター学外教育体験活動の手続きについて

図1



①島根大学教育学部附属教育支援センター（以下支援センターと略記）から各地教委へ依頼文書発送

②市町村教育委員会から各幼小中学校（以下各学校と略記）へ通知

学生受け入れ募集について各学校へ通知。必要に応じて説明会開催等の連絡・調整を行う。

③各学校で募集を検討・決定・報告・送付

- ・実習セメスターにおける学生受け入れを検討。必要に応じて支援センターへ問い合わせ。
- ・教育委員会へ学生受け入れ希望の有無を報告。
- ・募集用紙（別紙様式）を教育委員会および支援センターへ送付。

④市町村教育委員会から支援センターへ報告

支援センターへ各学校の学生受け入れ希望の有無を報告。

⑤各学校と支援センター間で質問や回答のやりとり

- ・各学校からは、活動への質問や要望は、支援センターへ連絡。
- ・支援センターからは、学生に期待する活動内容の聞き取りや、質問に対する回答。

⑥支援センターから各学校及び学生へ通知

- ・学生への説明会を実施。その後、募集を開始（約2週間）
- ・学生との最終調整を、支援センター担当者が7月末までに行う。
- ・教育委員会と各学校へ、依頼及び参加学生の名簿を8月中旬頃に送付。
- ・大学での事前指導を8月下旬に実施。

⑦各学校から参加学生へ連絡

- ・支援センターからお送りした名簿に基づき、学生への連絡。
- ・必要に応じて各学校で事前オリエンテーションを実施。

⑧支援センター教員が活動の様子を把握（事中指導）

⑨支援センターが学生へ事後指導 応用期セミナーの実施

活動が終了後、活動記録票へのサイン。専任教員が順次事後指導を実施。

⑩支援センターから各学校へアンケートの発送

活動が終了した各学校へアンケートを送付。

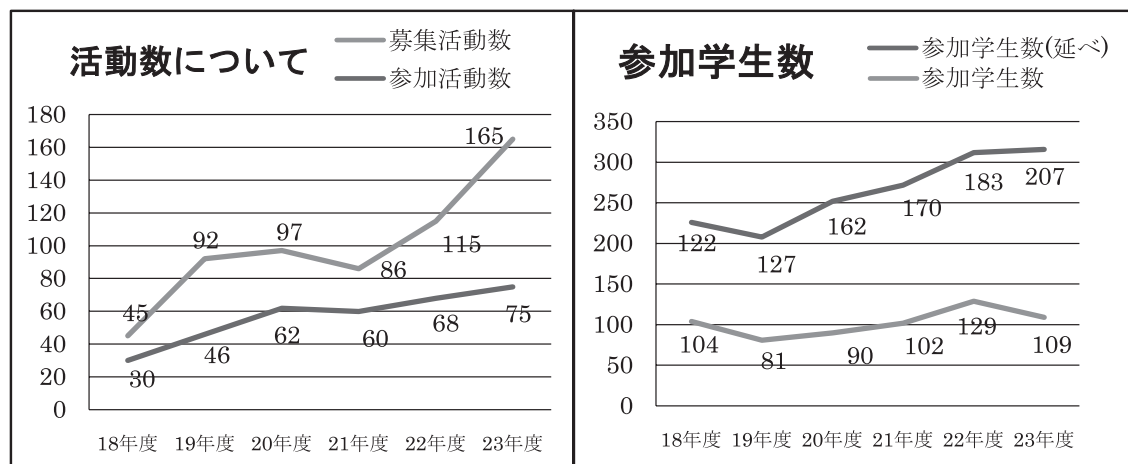
⑪各学校から支援センターへアンケートの返送

アンケートの回答をFAXにて返送

3. 活動の実績

表 1 は、過去 6 年間の実績をまとめたものである。

表 1



募集活動数は、この 6 年間で 3.7 倍になり、参加活動数も 2.5 倍となっている。平成 22 年度から 23 年度にかけて、募集活動数は 1.4 倍で、50 増加している。島根県内で 44 増加しており、特に松江市内において顕著である。参加学生数は大きな変化はないが、参加延べ人数が、1.7 倍となっており、1 つの活動だけではなく、一人で複数の活動に参加している学生が増えている。

平成 22 年度、23 年度の校種別についての実績を整理したのが、表 2 である。全体として、小学校の活動への参加が半数を占めている。これは、募集数も小学校が多いためである。中学校への活動を希望する学生は多いが、大学近辺での募集が少ないため、参加学生は少ない。個々にみると、幼稚園は、活動の増加は 3 であるが、参加学生は、20 人増加している。これは、単発の活動が増加し、その活動に多くの学生が登録した結果である。中学校への参加学生が増えているのは、平成 23 年度は、松江市内の中学校で募集が増加し、それに対して学生が多く登録したためである。

表 2

	平成 22 年度		平成 23 年度	
	参加活動数	参加学生数	参加活動数	参加学生数
幼稚園	13	45	18	65
小学校	40	103	42	103
中学校	12	29	14	37
特別支援・適応指導	3	6	1	2
合 計	68	183	75	207

Ⅱ 実習セメスターにおける学外学校体験で学生の得た学び

プロファイルシート教師力10の評価軸のうち、学校理解と子ども理解について、実習セメスターに参加した学生と、参加しなかった学生について比較したデータが表3である。

表3 実習セメスター参加学生の学びについて

08生	実習セメスター参加者	学校領域体験参加者	学校領域体験不参加者	基礎体験活動不参加者
学校理解	2年生2月	3年生12月	2年生2月	3年生12月
①それぞれの学校や校種の特徴を理解することができたか	3.0	3.9	3.0	3.8
②教師の仕事を理解することができたか	3.2	3.9	3.2	3.9
子ども理解(学習者理解)				
①子どもの発達段階の違いに応じたかわり方をすることができたか	3.6	3.9	3.6	3.9
②幼児・児童・生徒への支援、指導、相談への対応などが適切にできたか	3.6	3.5	3.6	3.5
09生	実習セメスター参加者	学校領域体験参加者	学校領域体験不参加者	基礎体験活動不参加者
学校理解	2年生2月	3年生12月	2年生2月	3年生12月
①それぞれの学校や校種の特徴を理解することができたか	3.4	3.8	3.4	3.8
②教師の仕事を理解することができたか	3.5	3.8	3.6	3.8
子ども理解(学習者理解)				
①子どもの発達段階の違いに応じたかわり方をすることができたか	3.9	3.9	3.9	3.8
②幼児・児童・生徒への支援、指導、相談への対応などが適切にできたか	3.7	3.5	3.6	3.4

当然のことであるが、セメスター体験を終えた学生は、「学校理解」の評価平均値が不参加者に比べて0.8以上高い。そして、セメスター体験者は、体験前と体験後では、0.5～0.6数値が上昇している。日々の学校現場体験を通して、教師の業務を具体的に観察し、それを支える活動を行うことにより、附属学校で行う学校教育実習だけでは体験できなかった部分を補完し、深化していった姿がうかがえる。

ところが、「子ども理解」の指標では、セメスター体験参加者が体験前後で数値が横ばいを示しているのに対して、不参加者は体験後に数値が下がっている。これは一見、理解しがたいように思えることであるが、実は、セメスター体験において、より深く子ども理解が進み、「子どもを理解することはそう容易ではない」、あるいは「子どもを理解するにはよほどの努力や量が必要である」ということを、学生たちが現場体験から学んだ姿ではないかととらえている。

このような数値による比較を裏付ける事実として、今年度卒業する学生（2008年度入学生）のうち、3名を抽出して、そのセメスター体験の実態をもとに、どのような学びを得たのかを明らかにしたい。

1. 松江市内の小学校でセメスター体験を行った男子学生の実例

この学生は、附属学校での学校教育実習（以下実習と略す）前と実習後に合わせて82.5時間の活動に取り組んだ。実習前は3年学級で、実習後は5年学級で、それぞれ学習支援に従事した。そこでの学びの着眼は「教師がどのように授業の『めあて』を提示して発問するかを観察し学ぶ」というものである。

そのふりかえりには次のような記述が見られる。

附属学校では導入からめあての提示を丁寧に行っていたが、体験した学校ではいきなりめあてを提示して考えさせるといった感じだった。確かにクラスに様々な児童がおり、それに対応する難しさもあり、導入するだけでものすごく時間がかかるかもしれないと考えた。またそれを支える学級経営の仕方についても考えさせられた。望ましい学習規律をつくるために、児童に対してどのような支援を行うべきなのか考えてみたい。

附属学校では、児童の学ぶ意欲を引き出す導入やめあてを工夫して授業づくりを行っているのに対して、公立小学校ではなかなかそうも行かない実態を目の当たりにして、いかに一人一人を支えていくことが難しいかを実感しているといっている。

こうした経験を積んで、この学生は4年生になった後も、自ら進んで、同じ学校で通常の基礎体験として学習支援を継続させた。もちろん、学校側から「是非来てほしい」と強い要望があったことも、この学生のモチベーションを高めた。データに表れている時間数は82時間であるが、実際にはそれ以上に学校の求めに応じて随時学習支援に通い続けた。

この学生の活動終了時、学校側の評価は次の通りである。

積極的に子どもの中に入り、子どもの思いを受け止め、活動していた。自分の伝えたいことを、具体例を出しながらわかりやすく伝えようとする姿勢もすばらしい。今後も目標の実現に向け、たゆまぬ努力を続けてほしい。

この時、この学生は、活動の目標として「先生としての、子どもたちとの距離感のとり方を学ぶ」を挙げている。4年次の10月から12月の三ヶ月にわたって得た学びを次のように記している。

三ヶ月間、同じクラスで学習支援を行い、朝の会と帰りの会に話をさせていただくなど、児童とふれあうだけでなく、教師の立場として指導することも少しはできたのではないかなと思う。しかし、まだまだ話がまとまらず、淡々と話をしてしまうことがあるので、児童に自分の思いを伝える技術の習得を目指したい。

今回は担任の先生と話す機会や、放課後の先生方の仕事を手伝わせてもらう機会があり、学校現場の仕事を様々なことができた。これから教師として働くにあたっての見通しをもつことができた。

教師という仕事を、直に子どもたちや担任教師と関わりながら見つめ、何をすることが最適なのか、一つひとつの場面から学んでいった姿がうかがわれる。そして何よりも、自分が必要とされる存在であることを知らされ、教師としての自己有用感を高めていったといえる。

2. 学校教員を目指す学生が、異校種セメスター体験を行った例

ここに示す事例は、いずれも中学校の理科教員を志望していた学生である。二人ともその志望を実現させた。附属学校での実習以外には小学校の体験はないが、実習セメスターでは自ら異校種である小学校での活動を希望し、実施した。戸惑うことが多かったはずだが、週に二日のペースで通い続け、学校に馴染んだ。活動目標は次の通りである。

- ・自分ができることは積極的に行う。
- ・授業中、先生方が工夫されているポイントを見抜き、今後の活動に生かす。
- ・子どもたちにとって自分は先生であり、先生としての自覚をもって行動する。

附属学校での実習を終え、自信をもって活動に臨んだ。二人のふりかえりを以下に示す。

だんだん学校の雰囲気もわかりはじめ、リラックスして子どもたちとふれあうことができていたのではないかと思う。初めはあまり会話のできなかった児童とも徐々に会話できるようになってきた。心の壁も少しずつ下がってきている。しかし、これで満足せず、学校の教育活動に貢献していきたいと思う。

前半では学校現場の様々なことを知り、今度は自分で実際にできるようになろうと努めた。1年生を主にみていて、やってはいけないことをしていたり、けんかをしていたりする場面が多かった。叱ることは叱る側としてもよい気持ちにはならないが、繰り返さないためにはその場できちんと注意したり叱ったりすることが大切だと思った。

1年生にわかる言葉を使わないといけないと思ったが、想像以上に難しかった。しかし、その場その場で解決することができたのでよかった。

中学生への対応との違いにさぞ戸惑ったと思われる割には、学校側のサポートのおかげで、モチベーションが下がらずに、むしろ意欲が高まる方向で活動が進んでいったことがうかがえる。そして、子どものよさを大事にし、尊重しようとする姿勢がうかがえる。

このように、実習セメスターでは、学校教育実習と前後して活動することにより、教師になろうとする意欲を一層高め、教師や社会人としての自己有用感を高めるために、大変重要な役割を果たしているといえる。

Ⅲ 実習セメスターを実施した学校側からの報告

1. 実施概要

まず、平成23年度の本活動の実績は表4のとおりである。

募集学校数ならびに募集活動数が増え、実際に参加した参加活動数も、近年3カ年で増加している。そのおかげで、参加延べ人数も増加している。

しかし、参加学生数はそのように環境が整っているにも関わらず昨年比0.8倍の減であり、参加学生数の割合も3年生全体の63.7%となっている。つまり、参加している学生は、複数の活動を登録し、熱心に行っている一方で、まったく参加しないでいる学生も増加しているということになる。登録をしていなくても、何らかの活動を行っている可能性（例えば、従来の基礎体験活動領域における学校教育体験活動など）もあるので一概には言えない。

ただ、この実習セメスター制度を生かし、取り組んでいる学生は6割ほどであるという状況から、実習セメスターによってより幅広い教師力を身につけてようと取り組んでいる学生と、そうでない学生の二極化が進んでいるという課題を指摘できよう。

では、実際に学生を受け入れた幼稚園・小学校・中学校・特別支援学校側からの声をもとに、本活動のあり方について考察する。これは、平成24年1月において実施した「実習セメスターに関わる学外体験学修アンケート」の集計によるものである（実施協力校50：回収率98%）

2. 学生の活動の様子について

「学生の活動は期待通りであったか」という問いに対して、受け入れ校の5段階による回答は表5の通りである。平均値は4.3であり全般的に高い評価を得ている。

さらに、学生の様子について、「活動に対する参加意欲や態度」「子どもに接する姿勢」「学習支援に向かう姿勢」「あいさつなどのマナー」「服装等の生活面」について、分析的に回答したものが表6である。項目によって大きな違いは見られない。ただし、マナーや服装面等生活に関しては非常に高いが、学習支援について多少評価が低く、これらの傾向については、過去3年間の数値を見ても大きな変化は見られない。

次に、各項目における受け入れ校の記述内容について紹介する。

表4 実習セメスター実施学校数と参加者の推移

	平成21年度	平成22年度	平成23年度
募集学校数（校）	67	84（1.3）	103（1.2）
募集活動数（件）	86	115（1.3）	165（1.4）
参加活動数（件）	60	68（1.1）	75（1.1）
参加延べ人数（人）	170	183（1.1）	207（1.1）
参加学生数（人）	102	129（1.3）	109（0.8）
対象学生数（人）	172	171	171
参加学生数の割合	59.3%	75.4%	63.7%

数値は実数、かっこ内は前年比で小数第2位を四捨五入したもの

表5 学生の活動は期待通りであったか

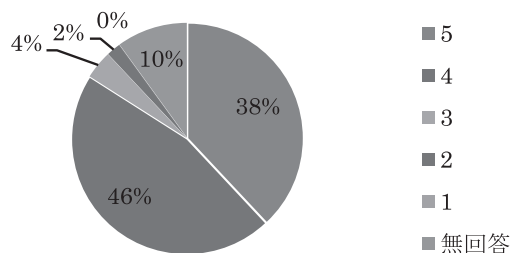
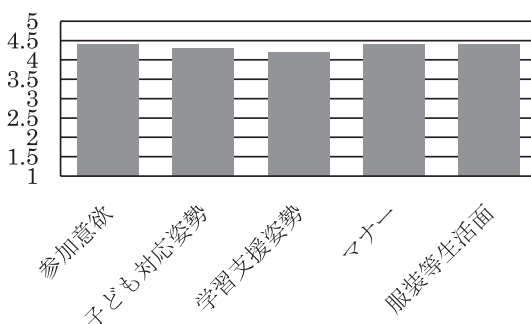


表6 学生の様子について



① 「活動に対する参加意欲態度」に言及したもの

- ・誠実な対応で、設定時間を越えて、多くの支援をしていた。(小学校)
- ・教職を志す意欲や社会性を充分感じた。(小学校)
- ・本校の事情で日程を変更することがあったが、快く引き受けていた。(中学校)
- ・自主的な考えや積極的な取組があるともっとよかった。(幼稚園)

実習セメスターと実習の大きく違う点として、学生自身が希望して臨む活動であることが挙げられる。よって、受け入れ校からの学生本人のやる気や主体性を感じるとの声が多い。一方で、幼稚園からもっと自主的に動いてほしいとの声もある。実習を小学校・中学校で行い、セメスター期間において初めて幼稚園での現場を体験する学生にとっては、学校と園の教育課程の違いから、活動に対する意欲はあっても、戸惑いから思うように活動できず、結果として指示を待ってしまう可能性もある。実習で幼稚園での活動を体験できないからこそ希望する学生に向けての事前指導や、該当幼稚園でのオリエンテーション等が必要に感じられる。

② 「子どもに接する姿勢」に言及したもの

- ・園児が楽しく活動できるように配慮できていた。(幼稚園)
- ・進んで子ども達に関わろうと声をかけていた。(小学校)
- ・生徒の心に寄り添いつつ、やる気を引き出すよい指導をしてくれた。(中学校)
- ・教室に入れない生徒や特別な支援が必要な生徒への対応で助かった。(中学校)
- ・発達段階をとらえた指導ができるといい。(幼稚園)
- ・回数が少なく、子ども達にとけこむところまでいかなかった。(小学校)
- ・子どもを叱らないといけない場面でできなかったので指導した。(小学校)

子どもへの関わりは、基礎体験活動や実習等で多くの経験を積んでおり、その成果がこの場でも発揮されている。一方、課題として、3点挙げられる。1つ目は、幼児への対応が難しいことである。先述したとおり、幼稚園もしくは相当の発達段階を扱う基礎体験活動が相対的に少ないため、子どもに対応する即戦力的な力が培えていないことが要因であろう。

また、設定回数が少なく継続的に子どもに関われないことで信頼関係を築くまでに至らなかったことについても、気掛かりな点である。「9回来るはずが1回しか来なかった」、「体調不良による欠勤が多い」、「講義等の所用で計画の変更が多かった」など、登録したもののきちんと活動をしていない学生が一部いるという実態が浮かび上がる。受け入れ校側としては、「わざわざ来てくれている」「厳しくすると来なくなるのではないか」という思いから、継続して来ていない学生に注意することが難しいかもしれない。実習に比べて安易な気持ちで臨んでいないか、ボランティア活動としてできるときに行えばいいという甘えがないかなど、活動に臨むにあたっての意識を高めるにあたって、大学と受け入れ校が連携して合同で事前オリエンテーションを行ったり、進捗状況を定期的に確認したりして必要に応じて学生に指導するなどの対策を練りたいところである。

子どもを叱ることができないことについては、学生の反省からもよく出てくる課題である。ここでは、受け入れ校にその点について学生に指導をしていただいている。送り出す学生の実習のふりかえりをもとに、教師力育成に向けての課題などを明確にし、受け入れ校側に提示することで、その実態を知っていただくことができれば、受け入れ校側も意識的に学生に指導ができ、効果的ではないかと考える。

③ 「学習支援に向かう姿勢」に言及したもの

- ・教材教具の作成や準備などにより、授業が充実した。(小学校)
- ・音楽が得意な学生で、音楽会に向けての補助的指導や支援によく取り組めた。(小学校)
- ・学習中の支援活動がスムーズで理解や行動に時間のかかる子ども達も集中して取り組めた。(小学校)
- ・個人指導を一生懸命していた。生徒達も質問しやすそうであった。(中学校)
- ・最終日に絵本の読み聞かせや得意なことをやってもらい、熱意を感じた。(特別支援学校)

学習支援に関しての記述評価では、よいものがほとんどである。また、学生の活動が、授業を行うのではなく、授業の補助・支援が多く、その人数が多ければ多いほど授業者からすれば「助かる・ありがたい」という構図であることが要因として挙げられるかもしれない。ただし、数値による評価は相対的に低いので、教職ならではの専門的な指導技術面については、現場から見た場合には未熟であり、さらなる伸長が期待されるということであろう。

④ 「あいさつなどのマナー」「服装等の生活面」に言及したもの

- ・礼儀正しく、大学での指導が徹底している。(幼稚園)
- ・あいさつがよく、マナー、姿勢もよい。教育実習や基礎体験活動での学びが生かされている。(小学校)
- ・全体的に常識的なふるまいで、安心してお願いすることができた。(中学校)
- ・連絡なしに休む学生がいた。(幼稚園)
- ・オリエンテーションから集まりが悪く、何回も同じことを繰り返し伝えた。(小学校)
- ・連絡がつかないことが数回あった。次の時にきちんと謝罪し、誠実さを感じた。(中学校)
- ・鞆を背負ったまま職員室に入室しており、伝えていく必要がある。(中学校)

服装やマナーなど社会人としての基本的な内容については、基礎体験活動や教育実践研究を通じた実習により、きちんと身につけていることが評価されている。一方で、それらがきちんとできず、迷惑をかけている学生が少数いることもはっきりしている。特に連絡が取れないことについての苦情が多い。これについては個人差があるので、不十分な学生に対しては、必要に応じて大学で個別に指導することが必要である。

3. 実習セメスターに関する受け入れの手続きについて

学生の様子については、事前・事後の指導等によって改善を図っていくことができる部分もあるが、受け入れの手続きといったシステマ的な面についても受け入れ校側の声をもとに検証してみたい。

実習セメスター実施に向けての手続き等については、下記の通りに実施している。

5月	教育委員会等に依頼文書ならびに募集用紙を送付後、各学校に通知
6月	各学校からの回答を教育委員会等が集約後、大学に送付
7月	学生に向けて合同説明会実施、その後応募開始、調整
8月	学生への事前指導、その後担当教員と各学校で連絡のやりとり 各学校から参加学生へ連絡、必要に応じてオリエンテーション
9月以降	実習期間以外において活動実施
12月	各活動終了 その後随時学生への事後指導 各学校へのアンケート実施

これについて、下記の通り回答が寄せられている。

表7 実習セメスターに関わる手続きについて（5段階評価）

	平成21年度	平成22年度	平成23年度
実施前の説明の時期について	3.4	3.6	3.4
実施内容の説明について	3.4	3.4	3.3
学生募集の手続きについて	3.5	3.4	3.3

数値的には大きな変化はないが、平均的な数値であり高評価ではない。そこで、評価を改善していくのにどうすればいいのかについて言及されているものを抜粋すると次のようになる。

（1）実施前の説明の時期について

- ・募集の時期・決定がもっと早いと、また実施期間に幅があると、いろいろな活動、発達段階に応じた活動が取り入れることができる。
- ・通知が8月の早い時期にあると喜ぶ。

早めの実施を期待している学校園が多い。しかし、いずれも説明会の早期実施というより、実習セメスターの早期開始を希望しているようである。「人手が足りないときに、とても助かる」ということが背景にあり、中には「1学期から実施したい」という意見もある。学生にとって実習セメスター期間以外は講義等もあり、1学期の平日に継続的に出かけることはかなりの負担になる。よって、実習セメスターならびにその説明会を早めることについては、実習セメスター期間を変えない限り、これ以上早める必要性については早急にはないと考える。

(2) 実施内容の説明について

- ・趣旨等は校長会を通じて理解されている。しかし、実際に対応し指導しているのは教頭・教務なので、担当者対象の説明会を開くと、手続き・指導等が充実すると思う。
- ・教育委員会が仲介しているため、具体的な部分が見えず、例年通りというイメージで行っている。直接連絡できれば、もう少し細かいニーズも伝えられる。

内容理解という点では、「教育実習と違い、どこまで指導に関わってもらってよいのかよく分からない」「学生に何を学び取らせるのか。先輩から学ぶのか、自分の授業をするのか」「不慣れなため、もう少し詳しい説明がほしい」など、実際に実習セメスターに関わっている実務者（教頭、担任など）の方から、よりきちんとした説明を求めている様子が分かる。そこで、担当者対象の事前説明会を行うことで、より趣旨の徹底や指導のあり方についての共有が図れると考えられる。まずは、参加者のある学校園を対象に8月頃、事前説明会を行うことが可能ではないかと考える。また、場合によっては進捗状況等を情報交換したり振り返ったりする連絡会議などの実施も検討したい。

(3) 学生募集の手続きについて

- ・応募がない場合、リベンジの方法があるとよい。
- ・交通費がわずかしか出せず、給食費も徴収した。学校によって対応に差があると申し訳ないと思う。ある程度、交通費等の基準が示されるとよい。

特に手続きについて言及したものはないが、人数が少なかったりまったく応募がなかったりした学校園については、何とか多くの学生を集めたいという願いがあり、さらにはその要因として交通費や交通手段があると考え、そのあたりについて検討したいという意見が提出されている。

交通費については、先述した実務者による連絡会議などで情報交換をし、各学校園がどのような工夫をしているのか、また相場はどれくらいなのかを共有することが必要に思われる。また、大学で補助が出来るのかどうかも検討したい。

また、実習セメスターではなく、3年生以上の基礎体験活動として春から募集を行えば、可能な学生は応募でき、早くから多くの学生が活動を開始できる可能性があることを周知することもできると考える。

Ⅳ 今後に向けた課題と取り組み

Ⅱ及びⅢで述べてきたように、実習セメスターによる学生の学びは大きく、この活動は教職をめざす学生にとって有効であると考えられる。しかし、参加学生の割合が6割ほど（23年度）であるのが現状である。また、参加学生の意識面、実施各校園の運営面等の課題も明らかになったので、来年度以降の実習セメスターにむけて、次の3点を提案したい。

1. 実習セメスター説明会について

7月初旬に、3年生に対して、説明会を実施している。学部教員による実習セメスターの意義、募集活動の紹介、学校現場教員による前年度までの参加学生の活動等の紹介を行っている。今年度までの内容を吟味し、さらに、参加した学生の学びをデータや4年生のスピーチより紹介し、3年生の参加意欲の向上につなげる。

2. 学生の参加意識について

実習に比べて体調不良による欠勤や日程の変更が多いなどの苦情をいくつかの実施校よりいただいた。実習セメスターに安易な気持ちで臨んでいる学生も少なからずいると考えられる。したがって、活動に臨むにあたっての意識を高めるために、前述の説明会だけでなく、事前指導においてもしっかりと指導をし、進捗状況を学生、実施各校園と定期的に確認をし、必要に応じて学生の指導を行っていく。

3. 実施各校園との連携

実施校から、実習セメスターでの学生の体験内容について悩むという意見をいくらかいただいた。また、学生からの感想の中に、子ども達と関わりたいが、教室の掲示物づくりや学習プリントの丸付けなど事務的内容が多かったという感想もあった。このような学校園と学生双方の活動内容についてのミスマッチを起こさないように学校園と教育支援センターの間で連絡協議会などの連携を取る場を設定する必要がある。

V おわりに

実習セメスターの活動は、各市町村教育委員会のご理解と、実施各校の先生方のご協力ご指導のおかげで、教職を目指す学生にとって大きな学びの場となっている。このことに感謝を申し上げたい。

今後も、学生が、より有意義な学びの多い体験ができ、また実施各校の教育に学生及び大学が貢献できるように、学校園との連携を一層密にしていきたい。またわれわれ教育支援センター専任教員も学生に適切な指導をしていきたいと考えている。